

メッセージアウトライン

ヨハネ12：1~8「イエスに注がれた香油」

過越の祭りの六日前にイエスと弟子たちは再びベタニヤに来られた。人々はイエスの一行のために晩餐を用意し、マルタはそこで給仕し、死からよみがえらされたラザロもその中にいた。(1,2) マルタの妹マリヤは少し遅れて入ってきたようである。彼女は非常に高価な、純粋なナルドの香油三百グラムを取って、イエスの足に塗り、彼女の髪の毛でイエスの足をぬぐった。家は香油のかおりでいっぱいになった。(3)並行箇所のマタイ26:6、マルコ14:3以下を参考にするとマリヤはまずナルドの香油が入っていた石膏のつぼを割り、イエスの頭に注ぎ、次に足に塗ったということがわかる。ユダヤの食事の習慣は椅子に座って食べるのではなく、床に寝そべて左ひじで自分の頬か体を支えながら右手で食事をつかんで食べた。ナルドは北インド原産の木の根から採れる香料で非常に高価なものであった。その高価な香料をマリヤは少しも惜しまず全部イエスに注ぎ、自分の髪の毛でそれをぬぐった。これが、兄弟のラザロを死からよみがえらせていただいた、そして足もとで福音を聞かせていただいたイエスへの尊敬、愛、感謝の表れであった。しかしイスカリオテ・ユダはマリヤのこの行為を責めた。(4,5)

「三百デナリ」→一デナリは当時の一日分の給料に相当する。今日でいえばこの香油は約三百万円もの値うちがある大変高価なものである。ユダはなぜそれを売って貧しい人々に施さなかったのかと言ったが、ヨハネはユダのことに6節で説明を加えて、「彼が貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼は盗人であって、金入れを預かっていたが、その中に収められたものを、いつも盗んでいたからである」と言っている。このことはヨハネをはじめ他の弟子たちにとって後になってわかったことであって、当時は誰一人としてユダのしていることを知らなかった。ただイエスだけは知っておられた。

イエスは「マリヤはわたしの葬りの日のために、それを取っておこうとしていたのです。あなたがたは、貧しい人々とはいつもいっしょにいるが、わたしとはいつもいっしょにいるわけではないからです」とマリヤを弁護された。(7,8) ここでもイエスは、「わたしの葬りの日のために」と言って、ご自分の死ぬ日が間近に迫っていることを教えられる。

マリヤは今この時、自分にできる最善のことをイエスにした。チャンスは今しかない。たとい人々からもっと上手なお金の使い方があるはずだと言われても、彼女にとってはそうではない。自分の持っている最も大切な、最も価値あるナルドの香油をすべて使い切ってしまう。彼女のイエスに対する感謝の思いはそれほど大きいものだったのである。私たちもこのマリヤの姿から学び、いつでもできることと、この時でなければ意味を失ってしまうということをよくよく見きわめていく必要がある。私たちを罪から救い永遠の滅びより救い出してくださるイエス・キリストへの喜びと感謝から、私たちは与えられている賜物や能力その他持てるものすべてを献げて、主に従っていく者になりたい。